馬鹿と場華②

他人様のことをとやかく言うのは、

趣味でなく、好きでもない。

皆さん、それぞれに生き様があり、

他者が無責任に介入するものではない。

だが、万人がその主義なら、

人間世界は無機物・無機質の場となり、

「我関せず」のかえって不気味な場となる。

本来なら、尊敬の対象の学者と先生、

この世界にも

「悪貨が良貨を駆逐する」法則が急速に展開中。

さらに、絶え間なく

小中高大で司直のお世話になる諸先生。

時の流れである。と言えば簡単。

ここでは、

情報操作に鋭意取り組むワル先生を俎上に。

対象を文系と理系の２分類し、

両系をまたぐトランスジェンダーは対象から外す。

劣化が進行しているのは、文系である。

一般的に、理系脳では、１＋１＝２であるが、

文系脳では、１＋１＝２は伝統脳に属するが、

２±α（α≠０）は異端脳に分類される。

また、文系脳では、前者は「お利口さん」「賢いね」

で済むが、後者は「大丈夫？」と言われてきた。

理系脳には、厳しい段階を経ての構築への連携があるが、

文系脳には、各自が思いのままに段階外しをし、

破壊への追求が優先することが多い。

破壊的進歩と称し、あるいは、おだてられ、

存在を目立たせる手法を採る時代に。

加速する情報化と大衆化により、この世界でも

「異端」のハードルが「ドン下がり」で、

個人が、自説を手近な機器を通じて、簡単・瞬時に、

しかも、熱狂的・偏執的に主張をできる時代になった。

さらに、傍若無人に。

今では、伝統宗教さえもが、その基盤が揺らぎ、

伝統と異端との境界が定まらず、不安定となる。

その結果、そこもかしこも、

扇動されたり、されたい大衆は簡単に、

伝統や、さらには異端に安住する上層部への、

揶揄や逆に喝采へと向かう。

捏造とその拡散は、機器操作の手さえあれば万人に可能で、

異端の生成過程にはデマゴーグが主要な役割をはたし、

本来なら、人々の安寧の創造へ向かう、

ある意味で「よき秩序破壊」も、

方向も定まらず、歓迎される異端とはなり得ていない。

後世、歴史家が、２１世紀初頭を

アカデミズム自爆と自滅の時代への開始と総括する。

原因のない現象はなく、その一つに、

メディア情報の氾濫と横暴がある。

TVでも、教壇でも、学究・学徒がタレント思考に専念し、

「受け」を競い合い、ある意味で「芸達者」が増殖中。

大宅壮一が遺言した、

「テレビによる一億総白痴化」の日本。

その日本にも、世界にも、

今、この現象への歯止め策はない。

**浜矩子**

会合で一人が述べた、この女性への痛烈批判。

帰途、本屋に立ち寄り、馴染みのないその著作を立ち読み。

バスに乗り遅れた。著作者は、浜矩子。

読むほどに、

なんとその論理の展開がメチャにしてクチャ。

これで、国際経済学者で大学教授？

ヒステリックな言い分の連射で、

疑われるなら、その著作本を読まれたし。

表紙の帯のお顔は「ドヤ顔」の印象派。

その後、目にした報道によれば、

定期の新聞業界の集まりの招待講演者として、

「ジャーナリストとエコノミストには共通点がある。

よきエコノミストが備える条件は、

独善的で懐疑的で執念深いこと。

ジャーナリストも同じで、謙虚で疑問を抱かず、

あっさり敗北を認めるのは、

よきジャーナリスト」**ではないっ！と、**檄を飛ばす。

自己陶酔の自信に満ちた講演。本来なら、

自信とは、その言動に論理的実質を要求する

厄介な資格であるのだが。

彼女の論旨展開の方法は、

意図的ミスリード型であり、短絡思考であり、

情報と状況操作によく使われる手法である。

「独善」を「謙虚」で対比させ、

「懐疑的」を「疑問を抱かず」で対比させ、

「執念深い」を「あっさり敗北を認める」で対比させる。

だが、「敗北」は「執念」とは対比不可で、

「面一ではない」のである。

さらに、付加語「あっさり」に幻惑効果を持たせ、

聴衆を馬鹿と見做す工作用語である。

彼女は曲者である。

吉田茂が某学者を「曲学阿世の徒」といったのを、

我々の年代は憶えている。

女史から読み取れるのは、気にくわぬ

事象・対象を概念化して、正邪・正誤への判断を、

自己都合誘導し、*しかも****一点だけを押さえて*、**

意図的に企んでいた結論へと、言葉巧みに、

***全体を否定させる誘導方法***、

つまり、これこそがメディアの得意技の情報操作と一致し、

この曲学阿世の徒は、ここで、

メディアの役割と誇らしく断定し、奨励する。

よき学者とは、

正当・適正・適格にして論理的冷静さで、

「状況をつくる」ことと「形をつくる」ことの

能力を競い合い、卓越していなければならない。

だが、

「そこのけ　そこのけ　お馬が通る」で、

天下御免の辻説法と、それを有難がるメディア。

アジであり、講演ではない。

上からの目線なれのメディア関係者でも、

彼女に傾聴する限り、一転して、無防備な

バカの集まりとなる瞬間である。

浜流に言えば、彼女は

よき講演者でもなく、よき学者でもない。

**メディア社会主義**

今のメディアというシステムは、

近隣のメディア統制諸国とは異なり、

日本では、与えられ・保障された自由と暇に任せて、

政治や政治家を批判するが、学問や学者を批判すれば、

学問の自由を脅かすと非難されるので、

利用し、甘やかして「特権階級化」する。

その反対側に存在する飯のタネとしての、

情報の受け手の庶民に、考える余裕を与えずに、

下層や下流に押しやり、メディアにとっては理想的な

**「メディア社会主義システム」**を、

観方を変えれば、**「メディア帝国主義」**を

構築しつつあるのが現状で、

それが意図する方向性も確実に定着しつつある。

この先生、本も書き、その容貌で睨みを利かし、

TVにも頻繁に登場していること知る。

気にくわぬ世の事象を論じ、

気にくわぬ相手を激烈な言葉で罵倒しまくる。

調べると、彼女は、依って立つ専門分野で、

2011年初に１ドル５０円を予測したが当たらず、

頭に来たのか、2012年にも５０円到来の出版物。

記録では、両年の平均値はともに８０円。

その特有の興奮で、数字も見通せていない。

為替相場での、この大幅にして大胆な予想乖離では、

この分野では不合格者である。

そこで、2013年では、「超円高予想は全く変わらず」と、

白旗を上げずに、強気の後退。

まさに、「あっさりと敗北を認めない」真の敗北者。

ますます格好がつかず、終には、アベノミクスを、

「アホノミクス」「ドアホのミクス」「妖怪アベノミクス」

と叫び、まさに「蟻地獄」状態を自作自演する。

「共産主義は愛にあらず、

共産主義は敵を叩き潰すためのハンマーなり」は、

毛沢東の語録の根幹である。

浜語録では、

「学問と教職は敵を叩き潰すハンマー」となる。

しかも、問題は提起するが事実を隠ぺいし、

原因を追究する前に感情が高揚し、最近の

日本のこなたかなたで出没する「わめきおばさん」で、

学究なら、その素質に問題を提起する。

だが、彼女だけが突出しているとは言えないのが、

今の時代の特徴である。

**メディアによる市民私物化**

メディアが、戦後のある時期から、

市民社会を覆いつくすほどに

タダ同然の電気代で、電波独占し、

有利な立場を獲得し、その結果、

タレントや弁護士は勿論、

政官財から学までをも**私物化**し、

この現象はますます深化して、洗脳化も進み、

私物化され洗脳化された、ある意味で被害者に,

その深刻さに対する覚醒はない。

それに乗じて、彼女の主張の空虚さを

強弁によって補強しようとすればするほど、

その虚構さを執拗に偽装しようとする意志が匂う。

だが、簡単に見破られる限りにおいて、

中途半端なワメキ屋とも言える。

だが、そうばかりも言っておられない。

調べると、東京新聞は、

浜の経済分析を「舌鋒鋭いご高説」と賞賛し、

このメディアは、彼女の記事掲載を、

「賜る」という言葉を使い、御製扱い。

事大主義と叩頭主義新聞として頑張るそうだ。

格調高い伝統左派からは、

「赤旗」より赤いと言われているこの新聞。

だが、最近の若いスマホ世代では、

共産党やその他の関連政党が保守で、

自民党が革新政党の認識との記事もあった。

信じるか否かは別として、

時代は予測を超えて変わりつつあり、面白い。

浜女史ご着装のクロス鮮やかなネックレス。

女史は渋谷カトリック教会信徒とある。

馬鹿と場華③へ